GENRE JAPONICA

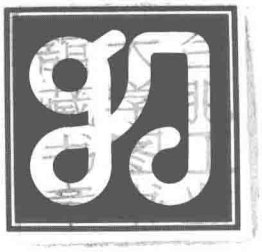
万有百科大事典

文学

SHOGAKUKAN

ENCYCLOPEDIA
GENRE
JAPONICA

万有百科大事典



1

文学

SHOGAKUKAN

GENRE JAPONICA

万有百科大事典 1
文学

©小学館 1973 1977

昭和48年8月10日 初版第1刷発行
昭和58年6月20日 2版第13刷発行

編集著作出版者 相賀徹夫

発行所 株式会社 小学館

郵便番号 101
東京都千代田区一ツ橋2ノ3ノ1
電話 編集・東京03－230－5620
製作・東京03－230－5333
販売・東京03－230－5767
振替 東京 8－200番

印刷者 大日本印刷株式会社
北島義俊

特抄コート紙 王子製紙株式会社

特抄アート紙 三菱製紙株式会社

特抄クロス ダイニック株式会社

表紙用特製色箔 日本ミクロコーティング株式会社

製本 大日本印刷株式会社

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします
＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください

Printed in Japan

ISBN4-09-525001-1

序

文学は、人類文化史の中心的な勢力であって、人類の生活を時間的にも空間的にも最大に物語るものである。それはまた、人間の知情意の世界や人間の真善美の世界の発展を克明に脈うっている。

文学の発生は言語の発生とともに古く、またそれは人類の存在とともに永遠につづくのである。そしてその終結は、人類の終結を意味するのみである。

この『文学』編をみると、世界の文学が、古代から現代にいたる人類の文化的歩みが展開されている。「会田綱雄」と「アイスキュロス」とが近隣人として並んで展開されているので、読者は人類の文化史を突然新しい光にあてて意識することができる。それは地球の東西の民族の文学が、一つの空間と時間のなかに集められているからであろう。

文学は文化の重要な産物であり遺産である。そして、歴史的にみると、文学は元来、宗教の経文と等しく、衆生を教養し、衆生を善に導き済度しようとしたものである。これは重要な古代文学の伝統であった。そうした伝統は、古代中国文学にもよく現われていた。古代ヨーロッパ文学にも同様にその伝統がおこなわれていた。そして近代ヨーロッパ文学にも、この伝統はいろいろの形式で継続されている。一八世紀になって文学が「芸術」というものに結合して、文学の目的が美を表現することになった。この場合「美」というシンボルは、人間の物欲とか煩悩とかいうものを否定した標語であった。また、自然主義文学も一面には人間の邪悪の世界を描いて人間のいましめとしたことは、衆生を善に導こうとしたことにほかならない。また二〇世紀になって「超現実主義」という芸術運動も美の表現を目的としていたことは、「美」によって衆生を済度しようとしたにほかならない。

わが国でも、『懐風藻』の序にあるように、文学は衆俗を教養するのに、もっとも尊いものであると言われている。

文学の発生というのは突然新しく起こるものでなく、なにかしらの文化の体系から発生するのであるから、文学の存在というのは歴史的存在である。ヨーロッパ人の文学について考えてみよう。ルネサンス以来の近代ヨーロッパ文学は、ギリシア文化とキリスト教文化から生まれている。東洋では、私の考えでは、まずインドの仏教文化と、中国の漢文化とはすばらしい文化体系であったと思う。そしてわが国の文学のなかには、古くは漢文化と仏教文化が流れこんでいた。また明治以来ヨーロッパ文学を通じてギリシア文化とキリスト教文化が流入してきた。この意味で、わが国の文学のなかには世界の重要な文化がみな、どこかで息をしていると思う。このことは、日本文学のなかに東西の二大文化が調和されていることを意味している。もともと東西の文化は互いに抵触していない。仏教もキリスト教も煩悩をすてよといって衆生を済度し、また漢文化もギリシア文化も同様のものであったからだと思う。

日本芸術院会員・詩人　西脇順三郎

■凡例

編集方針

(1)収録した項目は、文学に関する日本、東洋、西洋の人名をはじめとして、おもな思潮、流派、用語、雑誌、主要国文学史、作者不明作品にわたる。これを検索に便利な五十音順に配列した。

(2)人名項目の末尾に、その人物の名作、代表作とされる作品を厳選して内項目式に解説した。巻末索引の活用によって『世界名作事典』の役割をも果たせ得よう。

(3)百科事典の一環としての文学分野を構成するが、この一巻の独立性をも考慮して、哲学、宗教、演劇、美術など他分野の人物も、時代思潮認識の上からの必要性や、巻中引用の頻度などを基準に立項した。したがって、叙述は文学に引きつけて解説した。

(4)主要な人物に関しては、その生涯の厚味ある理解に資するため、生没年月日や場所、生没時の事情などにわたってできるだけくわしく付記した。

(5)古典の尊重は勿論であるが、本巻ではとくに、ゆれ動く時代に活躍中の現役作家にもかなりなスペースをあて、また従来わが国にはなじみの薄かった諸国の文学にも可能な限りの光を当てた。

(6)巻末索引は人名索引と作品索引とから成る。人名索引では本項目の出し方以外の慣用呼称—外国人名のフルネーム読み、日本人名の号読みなどをも掲げて読者の便を計った。作品索引は、そのまま名作事典の目次の役割を果たせるよう配慮した。

項目の示し方

(1)日本語および日本読みのものは、漢字、ひらがなを使用し、その下に読み方をひらがなで示した。

〔例〕 **赤と黒** あかとくろ

アーサー王伝説 ——おうでんせつ

(2)日本人名は漢字で姓名を記し、その下に読み方を、生没年（生年—没年）を西暦で記入した。また、中国、朝鮮の人名および項目名は漢字を使用し、原則として慣用の日本読みに従った。さらに、二〇世紀の人物に関しては原音をかたかなで記した。ベトナムの近代以前の人物は項目の次に漢字名を付した。

〔例〕 **尾上柴舟** おのえさいしゅう（一八七六—一九五七）

欧陽山 おうようさん オウヤンシャン（一九〇七—　）

グエン・ズウ(阮攸)（一七六五—一八二〇）

(3)以上の場合、読み方は現代かなづかいを用いた。

(a)かなの使い方は、だいたい発音どおりにし、「ゐ」は「い」、「ゑ」は「え」、「を」は「お」と表記した。

(b)「大」のように旧かなづかいで「おほ」と記したものは「おお」とし、「王」「黄」「応」「欧」「桜」などは「おう」で表わした。

〔例〕 **王鳴盛** おうめいせい

黄金伝説 おうごんでんせつ

(4)西洋人名はかたかなで姓だけをかかげ、その次に原語でフルネームを記し、また生没年（生年—没年）を西暦で示した。

〔例〕 **ブルトン** André Breton（一八九六—一九六六）

生（没）年に二説ある場合は、（九〇—一〇六／六八）のように併記した。

項目の並べ方

(1)項目は現代かなづかいの表記により、五十音順に配列してある。促音（つ）、拗音（や・ゆ・よ）、も音順にかぞえ、濁音、半濁音は清音のあとに並べた。かたかなで表記した外国語の長音符号「—」は五十音順から除いた。

〔例〕 アウエーゾフ（音順は「アウエゾフ」）

(2)同音の語は次の順序によった。

(イ)漢字の場合は画数の少ない順。

〔例〕 元稹、源信

(ロ)西洋人名は生年の早い順。

〔例〕 パウル・フレミング、イアン・フレミング

解説の方法

(1)現代日本語の標準的文章で平易に表現し、多くの人に理解できるようにつとめた。

(2)文体は漢字まじりのひらがな口語文とし、かなづかいは原典の引用や歴史的用語、固有名詞などを除き、すべて現代かなづかいとした。送りがなは誤読のないように配慮した。

(3)漢字は原則として当用漢字とその音訓表に許された範囲にとどめた。ただし固有名詞、歴史的用語、および慣用語などでひらがな書きでは読みにくいもの、理解しにくいものは当用漢字以外も用い、場合により読みがな（ルビ）をつけた。

(4)数字は一二三四を使用し、万、億の単位だけを入れた。ただし、固有名詞、および成語化したものや歴史的用語などについては、十、百、千なども使用した。

(5)計量の単位はメートル法を使用し、ミリ、センチ、キロ、グラムなどで表わした。ただし成語化したものや歴史的用語などについては、必要に応じて尺貫法を用いた。

(6)外国語の合成語は、単語の間を、人名では姓と名の間を、それぞれ黒丸（・）でつないだ。ただし、原文が—でつながれている語はダブルハイフン（＝）でつないだ。

(7)作品年代は、ほぼ作品のあとに（　）で示した。年代は原則として刊行年を採ったが、必要に応じて、発表、完成、上演、没後刊などを付記した。のちに単独刊行を見ない短編や、著しくおくれて刊行を見た戯曲などは、解説の年代感の流れに沿うよう、発表年を当てた。

(8)西暦紀元前後にかかるものは、そのつど、（前六二—後二二）のように示した。

年代の表記

年代は原則として西暦紀元により、（　）内にそれに相応する和年号を示した。

(イ)近代以前の西暦と和年号の関係は、厳密に月日まで比定せず、改年号で示した。

(ロ)南北朝時代の和年号は、南朝、北朝の順に併記した。

〔例〕 （元弘一・元徳三）

外国語の表記

外国語および外来語、外国の地名、人名は国語審議会報告、文部省編の刊行物、また各種専門辞典などを参考にして、原則的には現地読みに近い表記でかたかなで表記した。ただし、新聞、雑誌などで広く親しまれている表記は、なるべく慣用に従った。

(1)「V」音の表記は「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」を使わず、「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」とした。ただし、ドイツ語の「W」は「ワ、ウィ、ウェ、ウォ」とした。

(2)長音は長音符号で表わすのを原則として「—」で表わし、母音字を重ねたり、「ウ」は使用していない。

(3)「ti」「di」は原則として「ティ」「ディ」としたが、慣用に従って「チ」「ジ」としたものもある。

(4)ギリシア語はラテン文字に転記して示した。

(5)ロシア語は原文を示したうえ、ラテン文字に転記して示した。その転写法は別表のとおりである。

符号・記号

文中におけるおもな符号、記号は次のとおりである。

⇩　該当する項目への送りを示す。

↓　関連項目、併読が望ましい項目を示す。

＊　解説文中の熟語などの右肩上につけ、併読が望ましい意を示す。

〔　〕　解説文中の小見出し。主として内項目作品名。

『　』　書名、雑誌名、題名、作品名。

「　」　引用文または語句、とくに注意を促す語句。読みかえ、章名、編名、詩片。

表　別ページに表組みがあることを示す。

写　別ページに写真があることを示す。

図　参考図書。

問　問い合わせ先。

回　見学施設。

ロシア文字転写法

ロシア文字	ラテン文字	ロシア文字	ラテン文字
А	a	П	p
Б	б	Р	r
В	в	С	s
Г	г	Т	t
Д	д	У	u
Е	е	Ф	f
Ё	ё	Х	h
Ж	ж	Ц	ts
З	з	Ч	ch
И	и	Ш	sh
Й	й	Щ	shch
К	к	Ы	ï
Л	л	Э	e
М	м	Ю	yu
Н	n	Я	ya
О	o	Ь	’（アポストロフィ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

■編集顧問（五十音順、敬称略）

高津春繁
手塚富雄
西脇順三郎
久松潜一

■編集委員

秋山虔（日本）
市古貞次（日本）
大橋健三郎（アメリカ）
小津次郎（イギリス）
河島英昭（イタリア）
木村彰一（ロシアソビエト）
金達寿（朝鮮）
窪田章一郎（日本）
黒柳恒男（ペルシア）
桑名一博（スペインラテンアメリカ）
高津春繁（ギリシアローマ）
新庄嘉章（フランス）
神保五弥（日本）
田中於莵弥（インド）
暉峻康隆（日本）
徳永康元（東欧）
登張正実（ドイツ）
中村俊定（日本）
長谷川泉（日本）
前嶋信次（アラビア）
前野直彬（中国）
森田貞雄（北欧）

■本文執筆（*印は立項協力）

相浦杲
相沢博
饗庭孝男
青木一行
青木紀元
青木順三
青木誠二
青木生子
青山忠一
赤沢寛
赤羽淑
秋山健
秋山虔
秋山洋子
秋吉久紀夫
吾郷寅之進
朝吹登水子
芦津丈夫
芦田孝昭
芦田肇
安宅夏夫
安達美代子
渥美昭夫
阿部和子
阿部幸男
阿部良雄
荒井伸一
荒谷次郎
荒正人
新谷敬三郎
有賀文康
在里寛司
有吉保
安斎和雄
安西均
安藤更生
安東伸介
安藤元雄
安藤美紀夫
安堂信也*
飯島周
飯田吉郎
飯塚朗
飯塚信雄
飯豊道男
伊狩章
壱岐七濤
生島遼一
生田耕作
池内紀
池田修
池田雄三
池田廉
石井不二雄
石井靖夫
石川忠久
石倉昌治
石野力
石丸久
伊豆利彦
伊豆太朗
伊豆野タツ
磯貝英夫
磯辺馨次
磯谷孝
板津由基郷
市古貞次
伊地知鉄男
一羽昌子
一海知義
出かず子
出淵博
伊東一夫
伊藤勝彦
伊藤敬一
伊藤漱平
伊藤利男
伊藤虎丸
伊藤洋
伊藤博
伊藤正文
伊東泰治
伊藤嘉夫
稲岡耕二
稲垣達郎
稲沢秀夫
稲田三吉
稲田利徳
乾裕幸
犬養廉
井上謙治
井上修一
井上正蔵
井上隆明
井上登
井上宗雄
今井宇三郎
今井源衛
今泉文子
今井寛
今枝愛真
今西凱夫*
今道友信
入沢康夫
入谷仙介
岩城秀夫
岩城之徳
岩崎悦子
岩崎力
岩瀬孝
岩瀬悉有
岩田行一
岩田正
岩淵達治
巌谷大四
岩山太次郎
上田和夫
植谷元
植田祐次
上野理
鵜川義之助
牛島信明
臼田甚五郎
宇田敏彦
内川芳美
内田莉莎子
内田道雄
内山知也
江川卓*
榎坂浩尚
榎本隆司
榎本太
海老根宏
江本裕
遠藤祐
大磯義雄
大浦暁生
扇畑忠雄
大久保昭男
大久保正
大久保典夫
大久保輝臣
大久保敏彦
大河内昭爾
大河内了義
大沢正佳
大沢衛
大島勉
大曽根章介
大竹敏雄
太田三郎
太田青丘
太田善麿
大谷篤蔵
大塚秀高
大橋健三郎
大畑末吉
大森澄雄
大山聰
岡井隆
小笠原豊樹
岡田珠子
岡照雄
岡野他家夫
岡村繁
岡本勝
岡谷公二
岡保生
小川超
興津要
沖山明徳
奥田勲
奥野拓哉
奥野健男
小栗英一
小栗浩
小塩節
忍足欣四郎
小津次郎
小田切進
小田切秀雄
尾上兼英
小野寺郁夫
小野寺健
小場瀬卓三
小原広忠
小尾郊一
筧文生
掛下栄一郎
風間喜代三
笠原伸夫
柏原啓一
梶原正昭
絡川羔
片桐洋一
片野達郎
片岡文雄
片桐顕智
勝山功
加藤一郎
加藤信朗
加藤民男
加藤諄
金岡照光
金谷治
金子金治郎
金子昌夫
金田純一郎
加納秀夫
上尾竜介
神沢栄三
上島建吉
神谷忠孝
亀山照夫
唐川富夫
河合亨
川口常孝
川崎寿彦
川崎寅雄

川崎展宏
川嶋至
河島英昭
川副国基
河竹登志夫
河内清
川名公平
川端香男里*
河村錠一郎
川村二郎*
河村政敏
菊盛英夫
菊田茂男
菊田正信
木原孝一
木藤才蔵
北村純一
北川忠紀
北川太一
北垣信行*
北岡正子
北岡誠司
喜志哲雄
岸上慎二
黒柳恒男
桑名一博
桑原三郎
桑原博史
郡司正勝
酒井森之介
坂上博一
坂部恵
酒本雅之
桜井成夫
桜庭信之
佐々木彰
佐佐木幸綱
生野幸吉
白井浩司
白石悌三
白旗信
城山良彦
神宮輝夫
神保五弥
新間進一
末木利文
菅泰男
菅原信海
杉浦明平
杉浦忠雄
杉浦博
杉谷寿郎
杉橋陽一
杉冨士雄
杉本達夫
杉本つとむ
杉本春生
杉山武
助川徳是
重松泰雄
七字慶紀
品田一良
篠沢秀夫
篠原昭二
柴田健策
渋川驍
渋沢竜彦
嶋岡晨
島田昭男
島田修二
島田太郎
島田陽
清水三郎治
清水茂
清水純一
清水徹
清水芳子
志村博
志村正雄
首藤基澄
朱牟田夏雄
城
佐治俊彦
笹山隆
佐藤一郎
佐藤静子
佐藤保
佐藤恒雄
佐藤輝夫
佐藤東洋麿
佐藤農人
佐藤信夫
佐藤宏子
佐藤正彰
佐藤実枝
佐藤泰正
佐野利勝
佐野晃
佐崎順之助
沢崎洋子
沢村光博
三光長治
塩谷饒
志賀伝三
小松原茂雄
小松伸六*
小松勝助
小松郁子
小宮曠三
小山弘志
今栄蔵
近藤竜哉
近藤光男
近藤芳美
斎藤磯雄
斎藤栄治
斎藤忠利
斎藤忍随
斎藤美洲
斎藤道彦
早乙女忠
柴田陽
関口篤
関口功
関英雄
関山和夫
関良一
相馬庸郎
曽根元吉*
祖父江昭二
平善介
高木正一
高木卓
高島俊男
高田勇
高田瑞穂
高辻知義
鷹津義彦
高橋重臣
高橋静男*
高橋新太郎
高橋春雄
高橋英夫
高橋允昭
高橋稔
高橋康也
鷹羽狩行
高畠正明
高松雄一
高見英一
高見幸郎
高宮利行
高村智
高本研一
田川基三
滝田文彦
竹内康夫
竹内与之助
竹田晃
武田庄三郎
武田千枝子
田嶋一夫
多田智満子
立間祥介
田所義行
田中於莵弥
田中和夫
田中清光
田中敏雄
田中充
田中美代子
田中泰三
田中保隆
田中裕
田辺保
田辺貞之助
谷川道子
谷口泰
谷友幸
谷長茂
谷山茂
田野辺薫
玉泉八州男*
田村すゞ子
丹菊康子
千種堅
知念栄喜
千野栄一*
千葉宣一
陳明新
杖下隆英
辻祀
辻橋三郎
辻瑾
辻村敏樹
土田将雄
土屋哲*
鼓直
常木実
角田朱実
坪内章
鶴岡善久
都留春雄
出口裕弘
寺門泰彦*
暉峻康隆
土居寛之
土井久弥
伝田章
藤堂正彰
遠丸立
成瀬正勝
鳴海四郎
新倉俊一
西岡晴彦
西尾幹二
西尾光一
西宮一民
西本晃二
二宮敬
沼沢洽治
根津憲三
根本道也
野上素一
野口一雄
野口定男
野口達二
野崎睦美
野崎韶夫
野沢協
野村喬
野村琢一
延広真治
直野敦*
中川信
中西進
中島河太郎*
中条忍
中田美喜
中島敏夫
永田雄三*
中野孝次*
永野藤夫
中野三敏
中野美代子
中野里皓史
長橋芙美子
中村正
中村融
中村俊定
中村英雄
中村博保
中村幸彦
中村喜和
中本信幸*
中山恒夫
楢原良行
成瀬正勝
鳴海四郎
新倉俊一
西岡晴彦
西尾幹二
西尾光一
西宮一民
西本晃二
二宮敬
沼沢洽治
根津憲三
根本道也
野上素一
野口一雄
野口定男
野口達二
野崎睦美
野崎韶夫
野沢協
野村喬
野村琢一
延広真治
直野敦*
中川信
中西進
中島河太郎*
中条忍
中田美喜
中島敏夫
永田雄三*
中野孝次*
永野藤夫
中野三敏
中野美代子
中野里皓史
長橋芙美子
中村正
中村融
中村俊定
中村英雄
中村博保
中村幸彦
中村喜和
中本信幸*
中山恒夫
楢原良行
成瀬正勝
橋本郁雄
橋本堯
橋本達雄
橋本不美男
橋本芳一郎
長谷川泉
長谷川四郎

長谷川　尚
長谷川太郎
長谷川　強
波多野太郎
羽田　洋
畑　実
服部幸雄
服部正一
花野秀男
花房英樹
浜川祥枝
浜口乃二雄*
浜田義一郎
浜中英田
羽矢謙一
早崎守俊
林田慎之助
林　勉
原川恭一
原崎　孝
原　子朗
原　卓也
針生一郎
柊　原一
藤家壮一
藤家礼之助
藤井治彦
藤岡武雄
藤岡忠美
兵藤正之助
平井照敏
平井正穂
平岡篤頼*
平岡敏夫
平岡　昇
平田文也
平野敬一*
平野孝一
平野信行
平林盛得
平松幹夫*
平山久雄
樋渡雅弘
深田甫
深見　茂
福井芳男
福島正実
福田晃
福田清人
福田秀一
福田宏年
福本雅一
藤家壮一
藤家礼之助
藤井治彦
藤岡武雄
富士川義之
藤川芳朗
藤木宏幸
藤沢道郎
藤田一美
藤田祐賢
藤平春男*
藤村宏
藤本淳雄
船戸英夫*
富原芳彰
古川哲史
古田東朔
古林尚
古見日嘉
分銅惇作
北条秀雄
外間守善
保刈瑞穂
星野徹
保昌正夫
堀信夫
本郷義武
本庄桂輔
前川知賢
前川祐一
前嶋信次
前田敬作
前田透
前田利昭
前田利治
前田愛
前野直彬
益田宗
増田欣
増田義雄
松井孝子
松井利彦*
松井博光
松浦総三
松浦友久
松枝茂夫
松下和則
松平千秋
松野陽一
松原新一
松本克己
松本忠司
松本鶴雄
松本道介
松本雍
松山納*
松山信直
松村緑
松室三郎
丸尾常喜
丸山一彦
丸山匠
丸山昇*
丸山松幸
三浦逸夫
三木紀人
三木正之
御子柴道夫
水谷智洋
水野忠夫
水野稔
溝口雄三
三城満禧
満田郁夫
源高根
宮内豊
宮城達郎
宮崎嶺雄
宮下啓三
宮下健三
宮田正信
宮原朗
三好行雄
武川忠一
武蔵野次郎
武藤脩二
武藤元昭
村上菊一郎
村上哲見
村上淑郎
村瀬敏夫
村田正夫
村野四郎
村野一弥
村松定孝
室木弥太郎
目加田誠
本林勝夫
森修
森昭
森川俊夫
森常治
森田貞雄
森安達也*
森康尚
森山重雄
森脇一夫
山本功
山室静
山中裕
山田博光
山田清市
山田爵
山田和子
山下一海*
山崎庸一郎
山口明穂
山岸徳平
山越一夫
吉田熙生
吉田正己
吉村忠典
米川哲夫
米川良夫
米田巍
李哲*
黎波
若林真
鷲田哲夫
和田あき子
和田謹吾
渡辺一民
渡辺健
渡辺格司
渡辺淳
渡辺利雄
渡辺守章
安川定男
安田章生
安水稔和
安良岡康作
柳井滋
柳富子
簗瀬一雄
山岸徳平
吉田秀太郎
吉田幸一
吉上昭三*
横溝政八郎
横山伊勢雄
横山正
横山民司
義則孝夫
横関哲次郎
尹学準*
弓削三男
結城謙治
矢島文夫*
安井侑子
安井源治
安居香山
安井亮平
横田輝俊

■写真取材協力

浅野長親
新井　清
出光美術館
伊藤孝彦
稲生　永
井上フォト・プロダクション
円珠庵
大阪市立美術館
大阪大学
荻生敬一
オリオン・プレス
貝原真吉
柿衛文庫
学習院大学
片畑敬三
金井塚一男
神奈川県立金沢文庫
神奈川県立博物館
賀茂百樹
観魚荘
観世宗家
共同通信社
宮内庁侍従職
宮内庁書陵部
久保克敬
国学院大学
国立国会図書館
五島美術館
小山栄雅
座右宝刊行会
三枝朝四郎
実践女子大学
柴田光夫
清水護
集英社出版部
紫羊文庫
神宮徴古館
神宮文庫
静嘉堂文庫
関口芭蕉庵
綜合社
相馬御風記念館
尊経閣文庫
大通寺
大福光寺
田村芳子
朝護孫子寺
天理図書館
東京国立博物館
東京大学
東京ドイツ文化研究所
東京都立日比谷図書館
東洋文庫
内閣文庫
中村屋
南部利英
西田　実
西本願寺
西村孝次
西村弘明
日本近代文学館
上神忠承
ノーボスチ通信社
パナ通信
林　忠彦
P・P・S
平田宗胤
広島大学
フォト・パック
ブリティシュ・カウンシル
宝生院
防府天満宮
法融寺
穂久邇文庫
松浦史料博物館
三越
美保神社
武藤治太
村山古郷
本居宣長記念館
森村宜永
山形美術博物館
大和文華館
山本嘉将
山脇　修
横田正知
横山　重
吉川観方
吉田新一
立教大学
竜安寺
竜谷大学
ワイド・ワールド
早稲田大学
ワールド・フォト
ジョゼフ・ジオロ
ババリア・ベルラッグ
ラ・ゴエレット
ルネ・ロラン

■五十音目次

ワ …724	ラ …675	ヤ …658	マ …600	ハ …467	ナ …433	タ …350	サ …239	カ …120	ア …1
ヰ	リ …687	イ	ミ …622	ヒ …500	ニ …447	チ …375	シ …259	キ …157	イ …37
ウ	ル …698	ユ …665	ム …635	フ …515	ヌ …459	ツ …389	ス …315	ク …180	ウ …65
ヱ	レ …705	エ	メ …642	ヘ …561	ネ …460	テ …396	セ …331	ケ …198	エ …80
ヲ	ロ …712	ヨ …668	モ …646	ホ …580	ノ …463	ト …409	ソ …342	コ …209	オ …94

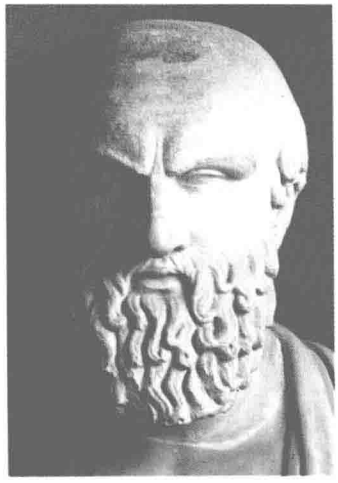
■主要項目目次

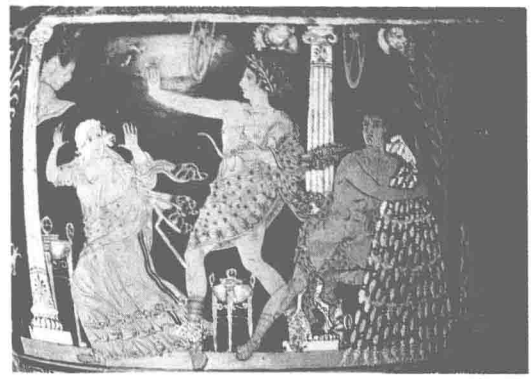
アイヌ文学……2
アメリカ文学……19
アラビア文学……23
イギリス文学……39
イタリア文学……50
インド・パキスタン文学……63
沖縄文学……105
歌謡……141
戯曲……157
ギリシア文学……174
詩……259
自然主義……273
写実主義……284
小説……298
象徴主義……299
推理小説……316
短歌……371
スペイン文学……328
中国文学……381
朝鮮文学……385
ドイツ文学……409
東欧文学……412
日本文学……452
俳句……467
比較文学……501
フランス文学……538
文芸批評……559
文学史……557
ペルシア文学……572
北欧文学……584
ラテンアメリカ文学……680
ラテン文学……681
連歌……710
ロシア・ソビエト文学……713
ロマン主義……720

■世界文学史年表……730
■作品索引……759
■人名索引……775

■装丁　粟津　潔
■レイアウト　冨田百秋　渡辺栄利

ア あ





アイスキュロス 〔左〕彫像。ローマ，カピトリーニ美術館
〔右〕『オレステイア』第三部『エウメニデス』の場面（壺絵）

アイスキネス Aischines（前三九〇ごろ―前三〇以後）古代ギリシアの弁論家。アテネの人。当時勢威を増したマケドニアとの親交政策を説き、反マケドニアの闘士デモステネスと対立した。この論敵への黄金の冠授与に反対、提案者クテシフォンの弾劾を表明したが敗れ、亡命先のサモス島で世を去った。その弁論は内容、風格ともにデモステネスに一歩ゆずるが、若いころの悲劇役者の経験から、実際の演説はよく人を惹きつけたらしい。演説三編が現存する。〈柳沼重剛〉

アイスキュロス Aischylos（前五二五―前四五六）古代ギリシアの大悲劇詩人。エウフォリオンの子として、アッチカのデメテル女神を祭る秘教の中心エレウシスに生まれた。古い神官職をつかさどる貴族の家柄である。若くして劇の競演に身を投じたが、前四八四年にいたってようやく最初の勝利を得ることができた。このとき祖国はペルシアとの死闘のうちにあった。詩人もみずから剣をとってマラトンの野に、サラミスの海に戦い、彼の兄弟は、戦場に散った。彼の劇の勝利は、くるのはおそかったが、その後三〇年間に一三回の勝利を獲得、名声は全ギリシア世界をおおい、前四七六年にはシチリアの僭主ヒエロンに招かれて同地に滞在、前四五八年『オレステイア』上演後シチリアを再訪、翌々年同島のゲラにおいて世を去った。

全体で九〇余編の悲劇をつくったと伝えられるが、伝存するのは、多くの題名と断片以外には七つの悲劇にすぎない。最古のものは前四七二年の、ペルシアの敗北を主題とした『ペルシア人』である。英雄伝説に名高いオイディプスの二人の子の争いを扱った『テーバイ攻めの七将』（前四六七）は、その後も長くギリシア人のもっとも愛好する劇となった。上演年代は不明であるが、おそらくこれら二作品以後のものと思われる『救いを求める女たち』と『縛られたプロメテウス』は、前者は新婚の夜に婿たる従兄弟たちを殺したエジプト王ダナオスの娘たちの話、後者は人類のためにゼウス大神に反抗した巨人神プロメテウスの話である。最後で最大の傑作『オレステイア』は『アガメムノン』『コエフォロイ』『エウメニデス』から成り、完全に現存する唯一の三部作で、オレステスの母殺しの伝説を新しいポリス（都市国家）的正義によって解決しようとしたものである。彼の劇は、堅実な構成よりはムードを重んじ、壮大な合唱隊歌によって全体の調子をかもしだす。彼は神々の終局の正義を信じ、人間の正義がついには神の正義と一致することをつねに問題として、悲劇においてうたったのである。〈高津春繁〉

〔縛られたプロメテウス〕 Prometheus Desmotes 悲劇。上演年代は不明。『テーバイ攻めの七将』（前四六七）と『オレステイア』（前四五八）との間に上演された。『火をもたらすプロメテウス』『解かれたるプロメテウス』との三部作。クロノスと巨人たちの支配にとってかわったゼウスと、オリンポスの神々になおも反抗する巨人神プロメテウス。彼は人間に火を与え生活の技を教えたのでゼウスの怒りをかい、岩山にしばられるが屈服しない。オケアノスの娘の合唱隊、オケアノス、そして哀れな乙女イオとの対話。彼女はゼウスの愛のために女神ヘラの嫉妬によって牝牛の姿に変えられて放浪している。ゼウスは、自分の権力の座を奪う者をひそかに知るプロメテウスからその秘密を探ろうとしてヘルメスを送るが、彼は口を割らない。そのためゼウスの怒りを招き、その雷をうけてオケアノスの娘とともに奈落に落ちる。この作者にして初めて書きえた傑作。

〔オレステイア〕 Oresteia アイスキュロスの現存する最後の作品で、オレステス伝説にちなむ三部作。前四五八年に上演。第一部『アガメムノン』Agamemnon は、一〇年のトロイ戦争から帰還するギリシア方の大将アガメムノンと、夫の留守に従兄弟アイギストスと不義の関係を結んだ妻クリタイメストラの予言の術により死を覚悟するトロイの王女カッサンドラが登場、彼女と王はその妻の手にかかって宮殿の中で殺されてしまう。第二部『コエフォロイ』Choephoroi は、アガメムノンの王子オレステスの復讐である。彼は母の下で苦しむ姉のエレクトラと再会、見知らぬ人として宮殿にはいり、いつわって母に自分自身の死を告げ、まず母の愛人を殺し、ついでその嘆願にも耳をかさず母をも殺す。第三部『エウメニデス』Eumenides は、罪人オレステスを追う復讐の女神エリニエスとこれを叱る母の亡霊、彼を救おうとするアポロン、そこに女神アテネが現われ、母殺しの正否の裁きをアテネ市民に委ねる。アポロンは、ゼウスの意志をうけてオレステスに母殺しを命じたことをのべ、ついにアテネ女神もオレステスのために一票を入れ、票は正否同数となり彼は救われる。怒ったエリニエスはアテネになだめられ「慈みの女神」となって神域に導かれて行く。これによって、アトレウス家にまつわる血なまぐさい運命の絆がたち切られる。

この三部作は、難解な合成語が荘重な趣を加え、重々しい筆の運びがよく内容とマッチして、現代の読者にも強く訴える力をもっている。〈風間喜代三〉

□呉茂一他訳『ギリシア悲劇全集Ⅰ　縛られたプロメテウス　オレステイア三部作　テーバイに向かう七将』（人文書院）

アイソポス Aisopos 生没年不詳。イソップ（英語読み）の名で知られる古代ギリシアの寓話作者。『イソップ物語』の作者とされる。ヘロドトスによれば、彼は前六世紀の人で、サモス人イアドモンの奴隷であったが、デルフォイで殺害されたという。少し後代の伝は、彼がフリギア人であること、彼の殺害の原因などをやや詳しく伝えるが、真偽のほどは定かでない。がに股、太鼓腹、色黒で醜悪きわまりない容貌の持主という有名なアイソポス像は、はるか後世の創作にすぎない。

〔イソップ物語〕 アイソポス作と伝えられる動物を主役とした寓話集。動物などの性格や行動に託して、民衆の日常の道徳的教訓を説き、寓話文学の先駆をなした。寓話といえばアイソポスと、その名はあまりに名高いが、無論、彼以外に寓話作者がいないわけでも、彼が寓話の創始者というわけでもない。彼以前にも、ヘシオドスやアルキロコスの詩の中に二三編の寓話が見いだされるし、そのほかにも、必ずや、われわれの知らない寓話作者があったに違いないのである。しかし、前五世紀には、寓話作者としてのアイソポスの名は全ギリシアに知れ渡り、古代人は、やがて寓話にはすべてアイソポスの名を冠して語るに至ったのである。アイソポス自身が寓話を文字に書き下したかは不明であるが、世間に流布していたそれらを、前三〇〇年ごろのアテネ人デメトリオスが最初に収集、編纂した。しかしこれは伝存せず、われわれの持つ最古の『イソップ物語』は、アウグストゥス帝の解放奴隷ファエドロスによるラテン

アイソポス せむしのアイソポス像。ローマ，ピラ・アルバニ博物館

アイソポス 〔右〕『イソップ物語』挿絵。一五世紀イタリアの木版画 〔左〕『イソポのファブラス』表紙。『イソップ物語』の七〇話を収めた日本最古の翻訳本。ロンドン、大英博物館

韻文訳であり、ついで、後二世紀のパブリオスのギリシア韻文訳がある。

五世紀以降にはそれらの散文化が始まり、さまざまのアイソポス寓話集が編まれ、また、東洋起源の寓話も付加されて、それは一七世紀のラ・フォンテーヌにおいて頂点に達したが、これらの中より現代の編者が適宜、選択編集したものが、今日の『イソップ物語』である。そこに語られるのは、ギリシア民衆の日常の生活における処生術であり、万人の規範たるべき大道徳でも、大哲学でもない。それでもなお、アイソポス寓話がわれわれの愛読書として共感を呼び続けるのは、動物などの性格、言動に仮託された人生の教訓が真に民衆の間から生まれたものだからであろう。日本でのもっとも古い翻訳本は『イソポのファブラス』(一五三三)、『伊曽保物語』のもと)で、訳文がローマ字書きであるので貴重である。 〈水谷智洋〉

□山本光雄訳『イソップ寓話集』(岩波文庫)

会田綱雄 あいだつなお (一九一四―　) 詩人。東京生まれ。日大社会学科に学ぶ。一九四〇年(昭和一五)、志願して中国に渡り、南京特務機関嘱託となる。南京で草野心平を知り、そのすすめで『中日文化』に、のち上海に移って『黄鳥』『亜細亜』などに作品を発表する。『歴程』復刊(一九四七)とともに同人となり、五七年、詩集『鹹湖』を上梓して第一回高村光太郎賞を受けた。「わたくしたちはやがてまた/わたくしたちのちちははのように/痩せほそったちいさなからだを/かるく/かるく/湖にすてにゆくだろう/そしてわたくしたちのぬけがらを/蟹はあとかたもなく食いつくすだろう/むかし/わたくしたちのちちははのぬけがらを/あとかたもなく食いつくしたように」(「伝説」)。残酷な生命の条理を自然の中に溶解し、原罪意識を夢幻的な物語として構成する特異な個性の詩人であり、その人間愛は戦慄的な恐怖に満ちたされている。 〈知念栄喜〉

□『会田綱雄詩集』(母岩社)

会津八一 〔上〕肖像 〔中〕書。東京、中村屋 〔下〕歌碑の拓本。東京、法融寺

会津八一 あいづやいち (一八八一―一九五六) 歌人・書家・美術史家。新潟市生まれ。八月一日に生まれたので八一と名づける。秋艸道人、八朔、渾斎と号した。早くから俳句をつくり、一茶を研究した。一九〇六年(明治三九)早大英文科卒業。新潟県有恒学舎、早稲田中学教師をつとめ、のち長く早大教授として英文学、奈良文化史、中国美術史を講じ、三四年(昭和九)、『法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究』(一九三三)で文学博士となった。四六年、『夕刊ニイガタ』を創刊、『新潟日報』の社賓となるかたわら、学芸活動を続けた。

一九〇八年(明治四一)からつくり始めた奈良に関する歌は『南京新唱』(一九二四)・『鹿鳴集』(一九四四)などに収められ、多くの人に愛唱されている。歌は、ひらがなだけで書かれている。書画にもすぐれ、書壇や画壇の外にあって第一流の名があり、明治以後におけるもっとも特色ある人間主義的作家である。終生独身ですごしたが、門下には学者、評論家、歌人、画家、篆刻家など、多くの俊才が出た。 〈安藤更生〉

〔鹿鳴集〕一九四〇年(昭和一五)五月、創元社刊。前著の『南京新唱』とその後の短歌を合わせて三三〇首(のちに増補して三七一首)収録。歌人としての名を高からしめた歌集で、万葉調を借りながら、美術に通ずる独自の近代感覚をうち出し、新鮮な味わいをもつ。五三年に『自註鹿鳴集』が著わされた。

かすがのにおしてるつきのほがらかにあきのゆふべとなりにけるかも

□『会津八一全集』九巻(中央公論社) ▽『会津八一の書』(中央公論美術出版)

アイトマートフ Чингиз Айтматов/Chingiz Aytmatov (一九二八―　) ソ連、キルギス共和国の小説家。農業大学卒業後、畜産技師として働きながら作品を発表。農村の因習に抗して愛と幸福を求める女性を描いた代表作『ジャミラ』(一九五八)は仏訳者の詩人アラゴンに激賞されレーニン賞を受けた。ほかに『最初の教師』(一九六三)・『さよならグリサルイ!』(一九六六)など、遅れた中央アジアに芽ばえる新しい人間関係を民族色豊かに描いた作品が多い。 〈中本信幸〉

アイトマートフ

アイニー Sadriddin Aini (一八七八―一九五四) ソ連、タジク共和国のペルシア語詩人・小説家。タジク近代文学の創始者。ブハラ・カン国に生まれ、ブハラで高等教育を受けた。教育者として出発し、革命前に『過去と現在』『土地を売るな』などの愛国詩を書き、『挽歌』(一九一八)はタジク文学最高の詩とされる。小説には一九世紀初頭以来のタジク民衆の苦しい歴史を描いた『奴隷たち』(一九三四)がある。いくつかの文学雑誌を発刊し、ペルシア古典詩人たちのすぐれた研究論文を発表、晩年の『回想録』も貴重。 〈黒柳恒男〉

アイヌ文学 ―ぶんがく アイヌが文字を使うようになったのは明治以降で、この民族の生活の中に生まれた神話、伝説、英雄物語、叙情詩、神神を祭る詞、昔話などすべて文字に書かれず長い間口承されてきた。アイヌ文学も歌謡文学と散文文学に二大別され、歌謡文学は叙事詩群と叙情詩群に分けられる。叙事詩群の中で重要なものには「神謡(カムイユーカラ)」・「聖伝(オイナ)」・「英雄詞曲(ユーカラ)」・「婦女詞曲(メノコユーカラ)」の四つがあり、叙情詩群の中で注意すべきものに「哀傷歌(イヨハイオチシ)」・「恋慕歌(ヤイカテカラ)」・「情歌(ヤイサマネ)」の三つがある。散文文学では「神々の昔話(カムイウェペケレ)」・「人間の昔話(アイヌウェペケレ)」・「和人昔話(シサムウェペケレ)」を主要なものとする。

「神謡」はアイヌの信仰、生活の典拠となった神話を内容とするもので、種々の自然神の自叙形式をとる説明神話と、人文神アイヌラックルの自叙形式をとる人文神話を内容とするものの二つがあるが、北海道南部の胆振、日高地方では後者を「聖伝」と特称して神聖視する。「神謡」は比較的短編

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

の叙事詩で、神々が人間の口をかりて、「我は某神にて、何々せり」という自叙形式でその出自経歴、功業などを物語るもので、随所に「サケ（酒）へ」と称する囃詞を挿入して歌われるのを特徴とする。「英雄詞曲」はアイヌ文学を代表する大叙事詩。「婦女詞曲」はシヌタプカ姫（時にオタサム姫）を女主人公とする叙事詩で、恋愛を内容とするヨーロッパ中世のバラード（譚詩）を思わせるような小品文学である。

「哀傷歌」は囃詞を入れそれぞれの節回しでくり返しながら、悲哀、恋情の苦悶を涙とともに歌うもの、「恋慕歌」は思慕の情にたえず物に憑かれたように、うつろな心で歌う叙情歌、「情歌」は自己の不幸な境遇、悲喜哀歓を即興的に歌にするもので、「ヤイサマネ」という囃詞を入れる。アイヌの叙情歌謡中、もっとも調子も明るく、楽しい民謡風のものである。散文文学の「神々の昔話」は神々の自叙談で、叙事詩の「神謡」を散文化したようなもの、「人間の昔話」は昔の大酋長の実歴談ともいうべきもの、「和人昔話」は日本本土の昔話がアイヌに伝わり、アイヌ化されながらも、丹念に語り伝えられたものである。

〔ユーカラ〕 Yukar「英雄詞曲」。ユーカラは、広義には「神々の詞曲、神謡（カムイユーカラ）」「婦女詞曲（メノコユーカラ）」も含むが、一般的には狭義の「英雄詞曲」をさす。「英雄詞曲」を「ユーカラ」と呼ぶのは北海道日高、胆振地方であるが、ほかに(1)サーコロペ（石狩、天塩、十勝、釧路、北見）、(2)ハウ（日高その他）、(3)ヤイエラッブ（胆振）、(4)ハウキ（サハリン＝樺太）があるが、それらは主人公名と発祥地を異にするだけで、大筋も口唱法も道南部のユーカラと大同小異であるから、ユーカラの名でこの種のものを代表させるのが例である。

ユーカラは江戸時代の文献には『蝦夷浄瑠璃』『軍談浄瑠璃』『祭文』などと訳されて散見するが、明治末期以降の金田一京助の採録と研究により、はじめてその全貌が明らかにされた。ユーカラは、民族理想の少年英雄ポイ・シヌタプカ・ウン・クル（少年シヌタプカ人）、敵方の呼ぶポイヤウンペ（北海道の小僧野郎）が、みずから、生い立ち、敵との戦争の情景などを述べ謡う長編の叙事詩である。短いものでも二〇〇〇～三〇〇〇行、長いものでは二万～三万行に及ぶものもある。アイヌによれば、ユーカラの発祥地トメサンベツ川河畔、シヌタプカの山城は、北海道日本海海岸浜益の地にあるというが、それら地名が現在のどこにあたるか諸説あってまだ明らかではない。

少年英雄は幼くして父母を戦乱のうちに失い、孤児として二人の年若い族人の青年男女の手で、敵の目を盗むようにしてたいせつに育てられて少年となる。その豪勇ぶりは、敵の忌み恐れるところとなる。種々の動因から敵（他部落、時には海の彼方の国人）との間に戦いが起こる。少年は族人および味方部落の諸豪をひきいて、連戦苦闘の幾歳をかさね、その勇名を海の彼方の国にまでとどろかす。人間同士の現実離れした凄絶、酸鼻な争闘、諸豪に憑依した憑神同士の争闘、女たちの巫術をもってする闘争の叙述など、内容は世界の原始的文学にもその比をみない。たまたま敵ながら、その不当な闘争に加わるのを恥じ、かえって少年英雄に同情し思慕する美少女が、そのすぐれた巫力と武勇をもって彼を助け、苦労をともにし、ついに手をたずさえて故郷シヌタプカに凱旋し、族人や味方の諸豪と久しくおとなわなかった神々や祖霊の祀りをおこない、祝宴を開き、集まった男女が婚約することなどあり、主人公もその美少女を妻としてしばし平和の生活にはいるというのが、多くのユーカラに共通する大筋である。

ユーカラ叙述の言語は詞曲語（ユーカラ・イタック）とよぶ古語で、日常会話の口語とは語句も文法も違って難解である。その語句は個人の創作というより、幾世代にわたる伝承の間に、おのずからみがき整えられたもので、修辞の巧をきわめた常套句の対句のくり返しである。文字に書かれた文学と違って、ユーカラのような口承文学では、常套句の反復は聴者にとってはわずらわしいどころか、より興趣を深くさせる。また同じような場面の描写に常套句が反復使用されることは、このような長編のものを記憶するのに大いに役だつものと思われる。ユーカラ伝承者（ユーカラ・クル）は女子にもあるが、男子にすぐれた者が多い。また血筋を引いてあらわれる傾向がある。演奏は祭りの夜、冬の無聊のおりなど屋内の炉辺でなされる。伝承者は手ごろな棒で炉縁を打ち、上体を前後左右に動かしなどして、忘我の境にひたって吟唱していく。夕方はじめて朝まで続けてなお終わらないような長いものであるため、激しい高低抑揚をつけては続かない。「歌う」というより「語る」に近く、テンポは四拍子ぐらいである。長い句は早めに、短い句は伸ばしている。節回し、高低、遅速などはもちろんこれを伝えた先人に範を取るであろうが、生来の声の美醜、個人的くふう、技巧によって十人十色である。聴者も、各自棒で炉縁や床を打ち、ときどき掛け声（ヘッ、ヘッ。ヘイ、ホイ。ハップ、パップなど）で囃して、演奏者に和し、力づけるというふうである。

ユーカラを実戦の物語として成立年代などまで推定した説があるが、無理のようである。考古学的遺跡などに強いて結び付けて仮説をなすより、ユーカラそのものに即しての比較と分析とがまずなされねばなるまい。巫女の託宣歌（ツス・シノッチャ）を母胎とする「神謡」「聖伝」（いずれも「ユーカラ」の中）に範をとって展開した「英雄詞曲」は文学の領域へ一歩近づきながら、まだ信仰的要素を脱しきれないものだから、依然として原始文学である。「英雄詞曲」は採録、文字化された数はその一部分にすぎず、今やアイヌ固有の文化の喪失、変容、伝承故老の死とともに、他のアイヌ文学同様、遠からず滅び去るべき運命にあるといえる。

〈久保寺逸彦〉

□金田一京助著『アイヌ叙事詩＝ユーカラの研究』（東洋文庫）▽知里真志保著『アイヌ文学』（元々社）▽久保寺逸彦著『アイヌ民族誌下巻・アイヌ文学』（第一法規出版）

アイヒ Günter Eich（一九〇七―七二）西ドイツの詩人。一九三〇年代に作家生活にはいり、トラークルなどの影響を思わせる詩を書いたが、第二次大戦後再出発。詩集『辺地の農場』（一九四八）は破局時代のドキュメントであるが、同時にここにすでに、人間世界の背後に隠された事物の不可視の謎を言葉に「翻訳」しようという、のちの『雨のたより』（一九五五）における「三角法的」試みの萌芽がみられる。『雨のたより』は戦後ドイツ叙情詩の頂点の一つ。しかし彼の名を広めたのはむしろ『クウェートへ行くな』（一九五〇）以来、一九六〇年ごろまでに数多く書かれた放送劇の脚本で、彼によって放送劇は純文学のジャンルにまで高められた。六〇年ビュヒナー賞受賞。

その後、詩集『誘因と石庭』（一九六八）では、言葉が晦渋と硬直の危険に陥るという懸念を抱かせるほどの極限に至るが、ここで一転して『もぐらもち』（一九六八）という散文を発表、「地口」を「世界把握のおそらく唯一の虚心坦懐のしかもリラ色の」可能性とみなして文学の方法とたのみ、ドイツ文学界にセンセーションをまきおこした。七〇年続編を出した。夫人は作家アイヒンガーで、晩年ザルツブルクに近い国境の村に住んだ。〈内藤道雄〉

アイヒェンドルフ Joseph von Eichendorff（一七八七―一八五七）ドイツの詩人・小説家。シュレジエンのカトリック系貴族の家に生まれ、ハレ、ハイデルベルク各大学で法律を学び、プロイセン政府の官僚として勤務しながら、文学活動にたずさわった。小説家としては、同時代のロマン主義文学の特性をよかれ悪しかれそのまま受けついでおり、代表的長編『予感と現在』（一八一五）は、甘美な詩情が稚拙な筋立てにまじり合い、自伝的な要素や奇談風な趣向が雑然と一体化した冗長な作品、『秋の惑わし』（一八〇九）・『大理石像』（一八一九）などの短編では、妖しい幻想の氾濫がともすれば作品の輪郭をあいまいにかすませがちである。しかし秀作『のらくら者の生活から』（一八二六）では、その幻想性がのどかなユーモアに包まれ、牧歌的な気分のみなぎった幸福な人生の夢が実現されている。

小説の中にもおびただしい詩が挿入されているが、彼の文学の本領は叙情詩の分野にある。その詩では夢のようにおぼろげな情調が、素朴な民謡風のしらべに載せて歌われており、親しみやすく、愛誦詩編とされているものも数多い。しかしそれらは単なる素朴な歌ではなく、自然と生の秘密への深い観照が、おのずから謎めいた言葉となってひびき出るもので、そのおもむきが、時として、きわめて微妙な象徴的風景を展開するところに、彼の詩の最上の美徳がある。〈川村二郎〉

□神品芳夫訳『予感と現在』（集英社）▽川村二郎訳『のらくら者』（筑摩書房）▽石丸静雄著『予感と現在（評伝）』（郁文堂）

アイヒンガー Ilse Aichinger（一九二一―　）オーストリアの女流小説家。処女作『より大きな希望』（一九四八）は戦後ドイツ文学の一記念碑。カフカ的寓話手法をよくし、『縛られた男』（一九五三）・『エリザ・エリザ』（一九五五）など、具象記述的であると同時に抽象的な言葉による清冽な説話体を実現している。ほかに放送劇や対話体の作品もある。詩人アイヒと結婚、二児の母。〈内藤道雄〉

アイヘンワリド Юлий Исаевич Айхенвальд／Yuliy Isaevich Aykhenval'd（一八七二―一九二八）ロシアの批評家。二〇世紀初頭に活躍したいわゆる印象主義の批評家で、文学の科学的研究を否定し、主観的印象を語るエッセイ風の批評を書き、『ロシア作家のシルエット』三巻（一九〇六～一〇）・『プーシキン』（一九〇八）・『西欧作家についてのエチュード』四巻（一九一～一〇）などがあり、一九二二年国外に追放された。〈新谷敬三郎〉

アイリアノス Claudius Ailianos 生没年不

詳。二世紀ローマの著述家。著作はすべてギリシア語で書いた。『動物の性質』『歴史談叢』が有名で、二編とも教訓臭の強い逸話集の体をなす。純粋な古典的ギリシア語で書かれたので、古代末期にはかなり尊重されたらしい。今日では失われてしまった作家の文章がよく引用されている点で貴重な文献となっている。〈柳沼重剛〉

アイリッシュ William Irish（一九〇三―六八）アメリカの推理作家。一九二七年『リズの子供たち』で、母校コロンビア大学のカレッジ・ユーモア賞を得た。四〇年にウールリッチCornell Woolrich の名で『黒衣の花嫁』を、四二年にはアイリッシュ名義で『幻の女』を刊行。この二つの筆名を使い分け、『黒いカーテン』『恐怖の冥路』『暁の死線』など恐怖とサスペンスを描く名手で、哀愁をたたえている。

アイルランド文学 ――ぶんがく　アイルランドでは五世紀のキリスト教伝来以前から一九世紀中葉の「大飢饉」の時期まで、ケルト語の一派ゴイデル語に属するアイルランド語（ゲール語）が一般に用いられてきた。一二世紀のヘンリー二世に始まり一六世紀のヘンリー八世を経て一七世紀のクロムウェルに至る植民地政策によってイギリスのアイルランド支配は確立するが、それと並行して言語面での植民地化も着実に進行し、一九世紀にはいるやアイルランド語から英語への地辺り的な移行が見られた。したがってアイルランド文学は二系列の伝統を継承していることになる。一つは母国語による文化遺産であり、一つは征服者イギリスの言語による文学（アングロ・アイリッシュ文学）である。アイルランド語文学の源流は豊かさにおいてギリシアのそれに匹敵するとされる神話、英雄伝説に発し、これらを収めた古写本のうち現存する最古のものは一二世紀にまでさかのぼる。中世アイルランド語の時代まではドゥルイドの流れをくむ吟唱詩人たちが豪族の庇護を受けて伝統的詩文を伝えていたが、一七世紀以降、近世アイルランド語の時代になるとゲール的氏族制度の崩壊によりこれら職業的歌人の流派は衰微し、より平易で自由な詩形がおこなわれ、やがてオーリアリの『哀歌』やメリマンの喜劇的風刺詩『真夜中の法廷』など一八世紀のすぐれたアイルランド詩が生まれた。一九世紀になるとこの国の言語的主導権はほぼ完全に英語へ移ったが、民族主義運動の高揚とともに母国語復活運動が起こり、とくに一八九三年ダグラス・ハイドの「ゲール語同盟」創立以来、執拗にアイルランド語文学の復権が試みられている。

アウグスティヌス　著述にふける聖アウグスティヌス。フィレンツェ，ウフィツィ美術館

アングロ・アイリッシュ文学の最初の偉大な作家は一八世紀のスウィフトであるが、その作品にはゲール的伝統につながる奔放な風刺精神の裏打ちが認められるであろうし、一九世紀の詩人T・ムーアは、アイルランド的叙情の美しさによってひろく愛唱された。しかしアングロ・アイリッシュ文学の独自性が明確に打ち出されるためには、ハイドの国語復活運動と呼応して展開されたアイルランド文芸復興運動をまたねばならない。この運動の指導者イェーツの初期の詩および詩劇はアイルランド神話に霊感を求め、彼の助言に従ったシングはアイルランド本来の姿がもっともよく継承されている西部地方の習俗、方言を劇作の素材とした。イェーツ、グレゴリ夫人を中心に一九〇四年に設立されたアベイ劇場を拠点とする演劇活動はこの運動全体の中核をなし、二〇年代のオケーシーに至ってアイルランド演劇の地位は確固たるものになった。一方、国外に去って文筆活動をおこなった作家の系譜としてワイルド、ショー、ジョイスなどがいる。とくにジョイスの影響力は詩におけるイェーツのそれに匹敵し、ベケットやオブライエンなどの異才を触発した。以上、二重の文学伝統について述べてきたが、この「分断された文化遺産」にいかに対処すべきかという問題は現代のアイルランド作家にとって回避しえぬ基本的課題なのである。〈大沢正佳〉

□尾島庄太郎著『現代アイルランド文学研究』（北星堂書店）

アウエーゾフ Мухтар Омарханович Ауэзов（一八九七―一九六一）／Muhtar Omarhanovich Auezov　ソ連、カザフ共和国の作家。カザフ民族の解放の過程とコルホーズ建設を扱った多くの小説や戯曲のほか、カザフとキルギスの民間伝承の研究論文、ゴーゴリ、シェークスピアのカザフ語訳がある。代表作の叙事詩的長編小説『アバイ』二巻（一九四二～四七）と続編『アバイの道』二巻（一九五一～五六）は、帝政ロシアの圧政に対する闘争にめざめる遊牧民の苦しい生活とカザフの民衆詩人・啓蒙家アバイ・クナンバーエフの生涯を叙情的な筆で描きあげ、一九五九年度レーニン賞を得た。〈中本信幸〉

アウエルバッハ Erich Auerbach（一八九二―一九五七）ドイツ生まれの文芸学者。ユダヤ人のためナチスに追われ、イスタンブールのトルコ国立大学教授となり、同地で大著『ミメーシス』（初版一九四六）を執筆。ホメロスから現代に至る二〇編の作品の文体分析を通して、作品の本質、ひいてはその奥にひそむヨーロッパそのものの姿を浮彫りにした。一九四七年アメリカに移住。〈藤川芳朗〉

アウグスティヌス Aurelius Augustinus（三五四―四三〇）ローマ・キリスト教会最大の教父。正統的信仰の完成者で、世界有数の思想家の一人。北アフリカの小都市タガステに異教徒の父と熱心なカトリック教徒の母モニカの子として生まれた。カルタゴ遊学中、今は散逸したキケロの『ホルテンシウス』を読んで哲学を志し一時期哲学的キリスト教を自称するマニ教やアカデメイア派の懐疑論に傾斜した。しかし、修辞学の教師としてミラノへおもむいた時、彼の生涯に決定的な影響を与えた司教アンブロシウスに邂逅、カトリックの信仰と権威、『旧約聖書』の比喩的解釈についての教えを受け、またはじめて接したプラトン派の書によって超越的存在への目をひらかれ、ようやく信仰への道が開けた。なお彼の内には、霊と肉との抗争があって決定的な回心が妨げられていた。三八六年ミラノのある家の庭で、「取りて読め」Tolle, lege という歌声を耳にした時、それを神の命として聞いて、ただちに聖書を読むといっさいの疑いが去り回心は成就した。翌年アンブロシウスより受洗、やがてアフリカに帰り、タガステで修道生活にはいったが、請われてヒッポの司祭となり、三九六年司教となった。以後ヒッポの司教として、アリウス、マニ、ドナトゥス、ペラギウス派などの異端との論争に参加、「教会の外には救いはない」との信念に立って教会の権威と正統信仰の確立に不断の努力を重ねたが四三〇年バンダル族のヒッポ包囲中に没した。

彼の著作は常人の想像を絶するほどの膨大な量にのぼり著書だけでも一一三に及ぶため、思想の全体像を把握することはきわめて困難であるが、思索の態度としては、懐疑論を克服して内的経験の絶対的確実性の根拠たる「われ」を真理への愛としての思索の出発点に置き、しばしばデカルトの先駆者にも擬せられ、知的光としての神の照明の下で内在的でありつつ、超越的である永遠必然の真理と出会う道を説いている。代表的な著作としては『告白』『三位一体論』『神の国』があげられるが、そのうち『告白』全一三巻はルネサンス以来もっとも広く親しまれている著書である。本書は青春時代の彷徨、マニ教からの離脱と回心への期待、劇的な回心の体験を扱った第一～八巻と、受洗と母モニカの死、神の使徒としての心境、聖書についての解釈を録した第九～一三巻の二部に大別されるが、単なる回想ではなく、読者とともに語り、ともに悩み、ともに神を賛美しようとする魂の告白である。〈藤田一美〉

□山田晶訳『世界の名著14　告白』（中央公論社）

アウソニウス Decimus Magnus Ausonius（三一〇ごろ―三九五ごろ）ローマ帝政末期の詩人。キリスト教徒の世俗文学の始祖。ボルドーに生まれ、のちの皇帝グラティアヌスの家庭教師、属州総督、執政官などを歴任した。当時流行のキリスト教擁護論や神学的議論に関心を示さず、もっぱら世俗的な詩を種々の韻律でつづった。同名の川を嘆賞した叙事詩形の『モセッラ』が名高い。〈中山恒夫〉

アウハディー Rukn al-Din Auhadi（一二六ごろ―一三三七）ペルシアの詩人。マラーゲに生まれ、イスファハンで生涯の大半を過ごした。代表作に『アウハディー詩集』のほか、神秘主義を主題とした二つの叙事詩『恋人たちの倫理』と『ジャムの酒杯』（一三三）があり、後者は前者にはるかにま

さり、道徳、倫理を扱っている。〈黒柳恒男〉

アウブ Max Aub（一九〇三―七二）スペインの小説家。一九三九年、内戦をフランスに逃がれ、四二年以降メキシコで活躍した。記録偏重を排し内戦の本質を追求した三部作『閉じた野』『開いた野』『血の野』（一九四三～五一）をはじめ、『善良なる意図』（一九五四）・『バルベルデ通り』（一九六一）など多くの佳作を残し、また戯曲にもすぐれた。〈牛島信明〉

アウフィー Muhammad 'Aufi（一二七〇ごろ―三三七）ペルシアの伝記作家。プハラに生まれ、サマルカンド、シンド、デリーの宮廷に仕えた。代表作に、ペルシア詩人伝、名詩選『精華中の精華』（一三〇）、二〇〇〇以上の歴史、文学に関する逸話集『物語集』（一三八）があり、ともに文学史上高い位置を占める。散文のほか作詩もした。〈黒柳恒男〉

アウルトナソン Jón Árnason（一八一九―八八）アイスランドの民話収集家。一八四五年、まだ学生のころ、ドイツのグリム兄弟にならって、友人と民話の収集をはじめ、七年後に小冊子『アイスランド民話』を出版した。後年単独で二巻よりなる『アイスランド民話』をドイツから出版。これらの民話は、民話の宝庫アイスランドの国内各地を訪れて、古老などから聞き集めたものに手を加えることなく活字にしたものである。〈森田貞雄〉

饗庭篁村 あえばこうそん（一八五五―一九二二）小説家・劇評家・新聞記者。本名与三郎。別号竜泉。竜泉寺町の質屋に生まれた。一八七四年（明治七）読売新聞社に入社し、のち小説を執筆して、八一～八二年には、岡本起泉、古川魁蕾と三才子と称され、八七年ごろには、須藤南翠と文壇の二長老格となった。八九年、読売新聞社から朝日新聞社に転じ、終生同社に関係した。元禄文学復興の先駆として、根岸派の代表作家となったが、しだいに劇評に力をそそいだ。代表著書は、小説集『むら竹』『饗庭篁村集』のほか『竹の屋劇評集』など。〈興津　要〉

青江舜二郎 あおえしゅんじろう（一九〇四―　）劇作家。秋田市生まれ。本名大島長三郎。東大印度哲学科卒業。在学中より『新思潮』同人となり処女作『火』によって小山内薫に認められた。第三次『劇と評論』に参加。第二次大戦中は約一〇年間を中国で過ごす。代表作として『河口』（一九三七）・『法隆寺』（一九五八）などがあり、青年演劇、ラジオ、テレビの作品も多い。〈清水芳子〉

青木月斗 あおきげっと（一八七九―一九四九）俳人。大阪市生まれ。本名新護。薬種商を営む。大阪満月会をおこし、水落露石、松瀬青々らと日本派俳人として大阪俳壇を代表した。一八九九年（明治三二）、俳誌『車百合』を創刊、正岡子規から「俳諧の西の奉行や月の秋」の祝句を贈られた。新傾向の影響も受けたが、一九一五年（大正四）、『ホトトギス』課題選者となり、その句柄は日本派風の写生に粋を加え、また、枯淡な面も見せた。句集に『月斗翁俳句抄』（一九五〇）がある。〈川崎展宏〉

元日や暗き空より風が吹く

青木正児 あおきまさる（一八八七―一九六四）中国文学者。号は迷陽。下関市生まれ。京大文科卒業。狩野直喜、幸田露伴に師事し、一九二〇年（大正九）小島祐馬、本田成之らと雑誌『支那学』を創刊、京都支那学の発展に大きく寄与した。東北大、京大教授を歴任。著書に、中国訳された明、清演劇史の空白をうめた『支那近世戯曲史』や文芸思想研究の『支那文学思想史』『清代文学評論史』のほか、書画、音楽から器物、食品に及ぶ博大な論考を残して、精深な中国理解を示した。〈戸川芳郎〉

□『青木正児全集』一〇巻（春秋社）

青野季吉 あおのすえきち（一八九〇―一九六一）評論家。新潟県佐渡生まれ。佐渡中学時代、北一輝の影響を受け社会問題に関心を持ちはじめる。早大英文科卒業。一九二二年（大正一一）、『新潮』に『心霊の滅亡』を書き評論家として出発、『種蒔く人』『文芸戦線』同人となり、プロレタリア文学運動の理論家として活躍、とくにプロレタリア文学にマルクス主義運動としての指標を与えた論文『目的意識論』が著名である。このころの評論集に『解放の芸術』（一九二六）・『転換期の文学』（一九三七）・『マルクス主義文学闘争』（一九三九）がある。三八年（昭和一三）人民戦線事件で検挙され、それを契機に転向、『文学界』同人となり、不如意の第二次大戦時下を耐え、『経堂襍記』（一九四一）や自伝的回想集『一つの石』（一九四三）などを刊行。戦後は日本ペンクラブの再建に努力、ついで日本文芸家協会会長となり会をまとめるとともに、言論の自由の拡大、擁護につとめた。ほかに『青野季吉選集』（一九五〇）や回想集『文学五十年』（一九五七）、没後刊の『青野季吉日記』（一九六四）などがある。〈紅野敏郎〉

青柳瑞穂 あおやぎみずほ（一八九九―一九七七）詩人・評論家。山梨県生まれ。慶大仏文科卒業。『三田文学』や堀口大学らの『パンテオン』『オルフェオン』などに寄稿。詩集『睡眠』（一九三一）を刊行、のち田畑修一郎、蔵原伸二郎らと同人誌『麒麟』に拠った。翻訳は多数あるが、ルソーの『孤独な散歩者の夢想』で戸川秋骨賞を受賞。犀利な詩人の感性と柔軟な翫賞家の眼をあわせもち、ひそかに息づく日本の美に深い愛を注いだエッセイ集に『ささやかな日本発掘』（一九六〇）・『壺のある風景』（一九七〇）があり、前者は読売文学賞評論賞を受けた。〈高橋新太郎〉

赤染衛門 あかぞめえもん　生没年不詳。平安中期の女流歌人。九六〇年前後（天徳・応和年間）に出生し、一〇四一年（長久二）以後に没したか。呼び名は父赤染時用が右衛門尉などになったことに因む。実父は母の前夫平兼盛ともいう。藤原道長の妻倫子やその子彰子に仕え、その間に漢学者大江匡衡と結婚して、その任地尾張にも下っている。子に挙周や女流歌人江侍従があり、夫匡衡に助言したり、挙周に母性愛を注いだりする良妻賢母型の逸話も多い。『紫式部日記』に和泉式部や清少納言とともにその名が見え、歌才の評価は高く、三三年（長元六）倫子七十賀屏風歌を詠進し、三五年には関白左大臣頼通歌合などに出詠した。家集に『赤染衛門集』があり、『拾遺和歌集』以下の勅撰集に七〇首余入集する。また、『栄花物語』の作者と想定する説もある。〈小町谷照彦〉

やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな

赤と黒 あかとくろ　詩誌。一九二三年（大正一二）一月に創刊したが関東大震災で休刊。翌年復刊して四号まで発行したあと号外一冊を出して廃刊。同人は萩原恭次郎、岡本潤、壷井繁治、川崎長太郎で、のちに小野十三郎、林政雄らが参加した。「詩とは？　詩人とは？　我々は過去の一切の概念を放棄して、大胆に断言する！　『詩とは爆弾である！　詩人とは牢獄の固き壁と扉とに爆弾を投ずる黒き犯人である！』」という宣言からもわかるように、当時の詩壇の主流であった白鳥省吾らの「民衆詩派」に対する批判がアナーキズムまたはニヒリズムの傾きをもって衝撃的に爆発したものである。その詩精神は詩史的にみても、現代詩の出発点としての重要な位置を占める。〈村田正夫〉

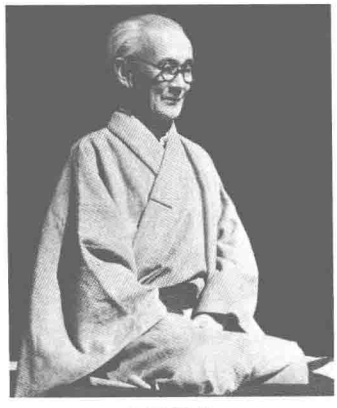
アカネ　短歌雑誌。一九〇八年（明治四一）二月～〇九年七月、根岸短歌会発行。全一八冊。伊藤左千夫編集の『馬酔木』終刊のあとをうけ、三井甲之の手で刊行された同派の機関誌。創刊後内紛を生じ、左千夫らは別に『アララギ』を創刊した。文芸雑誌の銘をうち、外国文学の紹介につとめるなど幅広い編集ぶりを示した。おもな執筆者に三井甲之、増田八風、大須賀乙字、広瀬青波（哲士）らがあり、土屋文明もここから出発している。一年再刊したが、翌年改題して『人生と表現』となり、個人雑誌的性格のものとなった。〈本林勝夫〉

阿川弘之 あがわひろゆき（一九二〇―　）小説家。広島市生まれ。一九四二年（昭和一七）九月、東大国文科卒業とともに海軍にはいり、通信諜報関係の作業に携わった。第二次大戦後、『年年歳歳』（一九四六）で文壇にデビュー、五二年に完成した『春の城』が翌年、読売文学賞を受けて作家としての地位を確立。以後、長編では『魔の遺産』（一九五三）・『雲の墓標』（一九五六）、短編では『夜の波音』（一九五七）・『青葉の翳り』（一九六〇）など実感に基づく手がたいリアリズムで戦争下の青春を描いた作や私小説で声価を高めた。その後、伝記『山本五十六』（新版一九六九）、『新潮』連載の『暗い波濤』などで新生面を開いている。七八年度芸術院恩賜賞受賞。

〔**春の城**〕長編小説。一九四九年（昭和二四）～五一年に主として『新潮』に連載、五二年、新潮社刊。自伝的作品で、東大在学中に戦争に遭遇した主人公が、卒業とともに海軍にはいって、任地の中国漢口で敗戦を迎え、翌年帰国、やがて文筆生活にはいるところまでの経過を描いているが、そこには戦時におけるひとつの青春の姿が鮮明に造形されていて、恋人や恩師の原爆による死の描写を含めて、戦争文学の中でも異彩を放つ。〈安川定男〉

□『新鋭文学叢書1　阿川弘之集』（筑摩書房）

秋田雨雀 あきたうじゃく（一八八三―一九六二）劇作家・小説家。青森県生まれ。早大英文科卒業。島村抱月に認められて一九〇七年（明治四〇）処女作『同性の恋』を『早稲田文学』に発表したが、やがて戯曲『第一の暁』（一九一〇）・『埋れた春』（一九一三）を書いて劇作家としての地位を確立。一三年（大正二）抱月の芸術座に参加し、のちに沢田正二郎と美術劇場を結成して劇団運営に苦心した。大正中期からしだいに社会主義思想に傾き、二二年、佐



秋田雨雀

々木孝丸らと先駆座を起こし、これがプロレタリア演劇の先駆となった。この前後『国境の夜』(一九二〇)・『骸骨の舞跳』(一九二四)などの作を発表、また『東の子供へ』(一九二二)や『太陽と花園』(一九二三)などの童話も書いた。二七年(昭和二)小山内薫らとソ連の革命記念祭に招かれ、翌年帰国ののちは創作活動から遠ざかり、当時盛んになってきたプロレタリア演劇のために力をつくし、新協劇団の顧問をもつとめた。第二次大戦後は俳優養成の舞台芸術学院を創立して院長となり、また日本児童文学者協会会長に推された。その作風は時代とともに変わったが、詩的傾向は終始失われることがなかった。ほかに『雨雀自伝』(一九五三)や『秋田雨雀日記』など。〈山本二郎〉

秋元不死男 あきもとふじお (一九〇一—七七) 俳人。横浜市生まれ。本名不二雄。旧号地平線。のち、東京三。小学校卒業。島田青峰に師事して、『土上』同人となる。新興俳句運動に投じ、多くの評論を書く。石橋辰之助、西東三鬼らと『天香』を創刊するが、一九四一年(昭和一六)の俳句弾圧事件で獄中生活二年。第二次大戦後、『天狼』に参加、『氷海』を創刊、主宰。第二回蛇笏賞受賞。句風は善意の庶民的ヒューマニズムで、「俳句もの説」を主張して俳句を物体詩と見るほか、擬声音による叙情性も失わない。「獄凍てぬ妻きてわれに礼をなす」などの獄中句は俳句史上ユニークなもの。句集に『街』(一九四〇)のほか『瘤』『万座』などがある。〈鷹羽狩行〉

鳥わたるときときときと罐切れば

秋元松代 あきもとまつよ (一九二一—) 劇作家。東京生まれ。小学校卒業。第二次大戦後、三好十郎を訪れ、そのすすめで処女作『軽塵』(一九四七)を書き、最初の上演作『礼服』(一九四九、同年俳優座初演)で注目された。的確な描写を基に堅実な作風で日本人の精神構造を追求し、代表作『村岡伊平治伝』を含む『秋元松代戯曲集』(一九六二)を刊行後、民俗的伝説の発生、形成と現代の民衆の生き方とを結びつけた『常陸坊海尊』(一九六四)・『かさぶた式部考』(一九七九)で好評を博した。〈祖父江昭二〉

秋山清 あきやまきよし (一九〇五—) 詩人。福岡県生まれ。日大社会学科に学ぶ。一九二四年(大正一三)から詩作をはじめ、第二次大戦前は『詩戦行』『黒色戦線』『弾道』『詩行道』などに、戦後は『コスモス』に拠り、アナーキズムを基盤としたリアリズムの詩や評論を書きつづけ、特異な存在として知られる。詩集『象のはなし』(一九五九)・『秋山清詩集』(一九六〇)のほか評論集も多い。〈村田正夫〉

秋谷豊 あきやゆたか (一九二三—) 詩人。埼玉県生まれ。日大予科中退。初め立原道造ら『四季』派の影響をうけて詩作し、『文芸汎論』『新詩論』などに作品を発表。第二次大戦後は『純粋詩』『ゆうとぴあ』の編集に参画する。一九五〇年(昭和二五)、『地球』を創刊、ネオ・ロマンティシズムを唱えて戦後の新しい詩運動を展開する。詩集に『遍歴の手紙』(一九四七)・『葦の関歴』(一九五五)・『登攀』(一九六二)・『降誕祭前夜』(一九六二)・『冬の音楽』(一九六九)があり、その詩は初期の『四季』的リリシズムからしだいに脱皮し、戦後の重い現実を通過した叙情性に支えられている。〈唐川富夫〉

アキレウス・タティオス Achilleus Tatios 生没年不詳。古代ギリシアの小説家。二世紀の人。アレクサンドリアの出身で多方面にわたる著作をしたと伝えられるが、伝記は明らかでない。残っている作品は『レウキッペーとクレイトフォン』と題する小説だけで、これは恋する若い男女の主人公が運命のいたずらで離れ離れとなり、各地を放浪したのち最後に結ばれるにいたるまでの冒険を描いている。死んだはずの主人公が生きていたりするスリルに満ちた筋立てや、各地の風物の記述が特徴的である。〈引地正俊〉

アクサーコフ Сергей Тимофеевич Аксаков /Sergey Timofeevich Aksakov (一七九一—一八五九) ロシアの小説家。ロシア東部ウファー県の古い貴族出身。カザン大学中退後ペテルブルグに出る。のちモスクワに移り測量学校に奉職のかたわら演劇評論をおこない、写実的演劇を主張。一八四三年以降モスクワ近郊アブラムツェボに居住しゴーゴリ、ツルゲーネフ、シチェプキンらすぐれた作家や俳優との親交を深める。回想記作家として名を残し、代表作『家族の記録』(一八五六)・『孫バグロフの幼年時代』(一八五六)・『回想記』(一八五六)は、故郷の自然や人々の生活を明澄簡潔な散文で写実的に描き出しており、生前にすでにこのジャンルの古典となった。なお二人の息子コンスタンチンとイワンはスラブ主義者として有名。〈藤家壮一〉

アクサーコフ Константин Сергеевич Аксаков /Konstantin Sergeevich Aksakov (一八一七—六〇) ロシアの評論家・詩人。イワン・アクサーコフの兄。スラブ派の指導的な理論家として、その見解を論文、詩、戯曲に展開した。文芸批判では自然主義派に反対し、ベリンスキーと対立、歴史に関してはロシア史の特異性を農村共同体と、民衆と国家との調和的共存に置き、これをピョートル一世の改革が破壊したと主張した。またロシア語の特徴を探求するいくつもの著述がある。〈米川哲夫〉

アクサーコフ Иван Сергеевич Аксаков /Ivan Sergeevich Aksakov (一八二三—八六) ロシアの評論家・詩人。コンスタンチン・アクサーコフの弟。法律専門学校を卒業後、スラブ派の雑誌、新聞の編集にたずさわり、農奴制と体刑の廃止を主張。一八五八年からモスクワのスラブ協会の指導者の一人として活動、七七～七八年のロシア・トルコ戦争には南スラブ人支援の運動をおこし、汎スラブ主義を主張。詩の代表作は農奴の悲惨な運命をうたった『浮浪者』(一八五二)。〈米川哲夫〉

アクショーノフ Василий Павлович Аксёнов /Vasiliy Pavlovich Aksyonov (一九三—) ソ連の小説家。レニングラード医科大学を卒業。一九六一年青年向き大衆誌『ユーノスチ』に長編『同期生』を発表、スターリン批判後のソ連の若い世代の思想や世界観、革命の伝統に対する責任の課題などを描き、好評を博した。その後、長編『星の切符』(一九六一)、中編『モロッコの蜜柑』(一九六三)などで現代ソ連の若い世代を描く有能な作家として、地歩を確立した。その他、短編『月への道半ば』(一九六三)・『パパ、教えて』(一九六三)・『ジコイ』(一九六五)、戯曲『いつでも売ります』(一九六六)、長編『電気への愛』(一九七一)などがある。現代ソ連の若手代表作家の一人である。

アクショーノフ

〔星の切符〕 Звездный Билет/Zvezdniy Bilet 長編小説。一九六一年刊。秀才の宇宙医学研究生ビクトルと弟デイームカを主人公として、ソ連共産党二〇回大会後の時代の青少年の生活や希望を生き生きと描いた作者の代表作。真理の追究と官僚的医学の世界の矛盾に悩むビクトルの悲劇的死、自由奔放な放浪生活を求める一七歳のデイームカとその仲間たち、彼らのスラングに満ちた言葉などを通して、この時代の青少年の気風が如実に感じられる。〈草鹿外吉〉

□原卓也・草鹿外吉訳『同期生』(白水社) ▽草鹿外吉訳『モロッコの蜜柑』(冬樹社) ▽木村浩訳『世界文学全集30 星の切符』(集英社)

芥川賞 あくたがわしょう 文学賞。一九三四年(昭和九)直木三十五が没したとき、文芸春秋社長菊池寛が先に死去した芥川竜之介と二人の名を記念し、新進作家に文学賞をおくることを発意、直木賞とともに設定し、三五年七月から実施された。正式名は芥川竜之介賞。上半期、下半期と年二回おくられる。第一回は石川達三『蒼氓』におくられ、第一一回(昭和一五年上半期)の高木卓『歌と門と盾』が受賞を辞退して話題となった。第一二回から太平洋戦争となり、第二〇回(昭和一九年下半期)清水基吉『雁立』で中絶した。第二一回(昭和二四年上半期)由起しげ子『本の話』、小谷剛『確証』から復活し、第三四回(昭和三〇年下半期)石原慎太郎『太陽の季節』から授賞式並びに記念パーティーが開かれるようになり、作品の新鮮さもあってジャーナリズムの注目をあびると同時に、新人作家登竜門として最高の権威ある賞となった。正賞腕時計、副賞五〇万円(当初五〇〇円、第二次大戦後五万円、昭和三〇年から一〇万円、四五年から三〇万円、五三年下半期から五〇万円)。選考委員は一九八一年(昭和五六)現在、井上靖、滝井孝作、中村光夫、丹羽文雄、安岡章太郎、吉行淳之介、遠藤周作、大江健三郎、開高健、丸谷才一。〈巌谷大四〉

芥川竜之介 あくたがわりゅうのすけ (一八九二—一九二七) 小説家。別号澄江堂主人、俳号我鬼。一八九二年(明治二五)三月一日、東京市京橋区(現中央区)入舟町で生まれた。実父の新原敏三は牧場をみずから経営し、牛乳販売業をいとなむ進取の人だったが、生後七か月めに実母のふくが発狂したため、母の実家である本所深川の芥川家に引き取られ、のちに養子となった。養父の道章はふくの長兄で、東京府の土木技師をつとめ、養母儔は幕末の通人として有名な細木香以の姪にあたる。芥川家は代代江戸城の御数寄屋坊主をつとめた家柄で、行儀作法のやかましい反面には、一家をあげて遊芸に親しむというような趣味性も強く、そうした家庭のふんいきは、江戸下町のなごりを濃くとどめた本所一帯の風物とともに、竜之介の感受性や美意識に独特の型をあたえ、伝統的な叙情を愛する詩的精神を育てることになった。実母の発狂が後年まで心の大きな傷として残り、一種の虚無的な感覚へ彼を誘ったこととあわせて、芥川文学の性格を決定した重要な原体験である。

彼は聡明だが、ひよわで神経質な少年として成長し、府立三中、旧制一高をへて、一九一三年(大正二)東大英文科に進み、一六年に卒業した。早

芥川賞　受賞作品・作家名一覧

年度		作品名	作家名
昭和10年	下	蒼氏	石川達三
昭和11年	上	コシャマイン記	鶴田知也
	上	城外	小田嶽夫
	下	普賢	石川淳
	下	地中海	富沢有為男
昭和12年	上	暢気眼鏡	尾崎一雄
	下	糞尿譚	火野葦平
昭和13年	上	厚物咲	中山義秀
	下	乗合馬車	中里恒子
昭和14年	上	あさくさの子供	長谷健
	下	鶏騒動	半田義之
	下	密猟者	寒川光太郎
昭和15年	上	平賀源内	桜田常久
	下	長江デルタ	多田裕計
昭和16年	上	青果の市	芝木好子
	下	連絡員	倉光俊夫
昭和17年	上	繃足の頃	石塚喜久三
	下	和紙	東野辺薫
昭和18年	上	劉広福	八木義徳
	上	登攀	小尾十三
昭和19年	下	雁立	清水基吉
	上	本の話	由起しげ子
昭和24年	上	確証	小谷剛
	下	闘牛	井上靖
昭和25年	上	異邦人	辻亮一
	下	春の草・その他	石川利光
昭和26年	上	壁	安部公房
	下	広場の孤独・漢奸・その他	堀田善衛
昭和27年	上	喪神	五味康祐
	下	或る『小倉日記』伝	松本清張
昭和28年	下	悪い仲間・陰気な愉しみ	安岡章太郎
昭和29年	上	驟雨・その他	吉行淳之介
	下	アメリカン・スクール	小島信夫
	下	プールサイド小景	庄野潤三
昭和30年	上	白い人	遠藤周作
	下	太陽の季節	石原慎太郎
昭和31年	上	海人舟	近藤啓太郎
	下		
昭和32年	上	硫黄島	菊村到
	下	裸の王様	開高健
昭和33年	上	飼育	大江健三郎
	下		
昭和34年	上	山塔	斯波四郎
	下		
昭和35年	上	夜と霧の隅で	北杜夫
	下	忍ぶ川	三浦哲郎
昭和36年	上		
	下	鯨神	宇能鴻一郎
昭和37年	上	美談の出発	川村晃
	下		
昭和38年	上	少年の橋	後藤紀一
	上	蟹	河野多恵子
	下	感傷旅行	田辺聖子
昭和39年	上		
	下	さびどわれらが日々―	柴田翔
昭和40年	上	玩具	津村節子
	下	北の河	高井有一
昭和41年	上	夏の流れ	丸山健二
	下		
昭和42年	上	カクテル・パーティー	大城立裕
	上	徳山道助の帰郷	柏原兵三
昭和43年	上	三匹の蟹	大庭みな子
	下	年の残り	丸谷才一
昭和44年	上	赤頭巾ちゃん気をつけて	庄司薫
	上	深い河	田久保英夫
	下	アカシヤの大連	清岡卓行
昭和45年	上	プレオー8の夜明け	古山高麗雄
	上	無明長夜	吉田知子
	下	杳子	古井由吉
昭和46年	上	砧をうつ女	李恢成
	下	オキナワの少年	東峰夫
昭和47年	上	誰かが触った	宮原昭夫
	上	いつか汽笛を鳴らして	畑山博
	下	れくいえむ	郷静子
	下	ペティさんの庭	山本道子
昭和48年	上	鶴の月	三木卓
	下	山草のつるぎ	森敦
	下		野呂邦暢
昭和49年	上	土の器	阪田寛夫
	下	あの夕陽	日野啓三
昭和50年	上	祭りの場	林京子
	下	岬	中上健次
	下	志賀島	岡松和夫
昭和51年	上	限りなく透明に近いブルー	村上龍
	下		
昭和52年	上	僕って何	三田誠広
	上	エーゲ海に捧ぐ	池田満寿夫
	下	螢	宮本輝
	下	梶の木祭り	高城修三
昭和53年	上	九月の空	高橋三千綱
	上	伸予	高橋揆一郎
	下		
昭和54年	上	やまあいの煙	重兼芳子
	上	愚者の夜	青野聰
	下	モッキングバードのいる町	森禮子
昭和55年	上	父が消えた	尾辻克彦
	下	小さな貴婦人	吉行理恵
昭和56年	上		
	下		

注　空欄は該当作なし。上＝上半期（12月～5月）、下＝下半期（6月～11月）。昭和20～23年中止

くから読書を好み、内外の文学書や哲学書、とくにストリンドベリ、ボードレール、ワイルドら一九世紀末文芸を耽読し、その影響を受けた。「彼は人生を知る為に街頭の行人を眺めなかった。寧ろ行人を眺める為に本の中の人生を知らうとした」とは後年の回想である（『大導寺信輔の半生』、一九二四）。

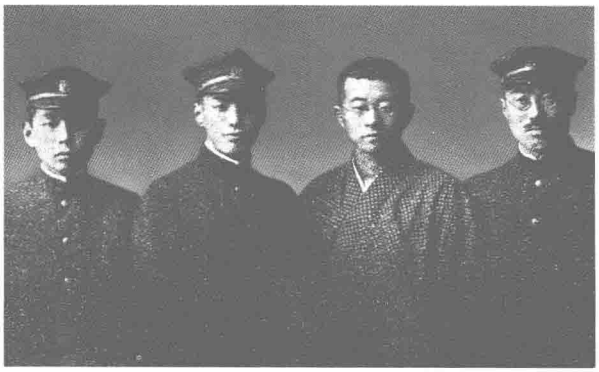
大学在学中に同窓の友人、久米正雄、菊池寛、松岡譲らと第三次（一九一四創刊）および第四次（一九一六創刊）『新思潮』を刊行、また一五年一二月に夏目漱石を訪れ、その知遇を得た。その年に書いた小説『羅生門』は芥川文学の方向を定めた最初の傑作である。しかし、文壇からはまったく黙殺され、翌年、第四次『新思潮』の創刊号に発表した『鼻』が漱石の激賞をうけるにおよんで、文壇進出のいとぐちをつかんだ。その後、海軍機関学校の英語教師をつとめるかたわら、人生の落伍者のうらぶれた哀歓を描く『芋粥』（一九一六）、日本の婦徳を軽妙に諷した『手巾』（一九一六）、「誤解」された名声の淋しさを描く『或日の大石内蔵助』（一九一七）など、第一短編集『羅生門』（一九一七）以下に収められる作品を相次いで発表し、流行作家の地位を定めた。一九年には機関学校を辞職、大阪毎日新聞社の社友（のちに社員）として、作家生活に専念することになる。

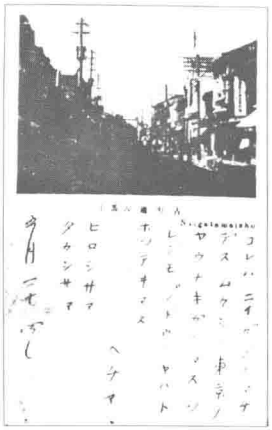
芥川文学は、二〇年（大正九）前後を過渡期として、ほぼ前、後の二期に大別できる。前期は内外の文献に取材した歴史小説が中心で、いずれも歴史的な事象に託して、現代に通じる普遍的なテーマを語るという共通の特色を持つ。多彩な主題の根底にあるのは、人間本来の悪である「我執」を抱いて、愚劣で醜悪な社会を生きてゆく苦悩―竜之介のいわゆる「娑婆苦」にまみれた人生への冷徹な認識と嫌悪であり、そうした厭世的傾向はやがて、人生の幻滅を芸術創造の情熱で代償しようとする、独自な芸術至上主義を生むにいたった。『戯作三昧』（一九一七）に最初の主張が見られる。作家生活のさまざまな煩忙に悩む滝沢馬琴は、深夜、憑かれたように筆を走らせる創作活動に没入して、はじめて芸術家の光栄を回復する。その「恍惚の瞬間」にのみ芸術家の「真の人生」があらわれ、その他の実生活はすべて「人生の残滓」にすぎないとするモチーフは、人間の恩愛を殺して作品の完成を求めた絵師を描く『地獄変』（一九一八）や、荒野に窮死することを願った孤独な芸術家像を描く『枯野抄』（一九一八）などにも通じ、また、切支丹物の代表作である『奉教人の死』（一九一八）も、殉教した少女の「刹那の感動」に「彼女の一生」を見るという信条を語っている。これらの短編を含む第三短編集『傀儡師』（一九二九）は名実ともに芥川文学の一頂点を占めたが、感受性のきらめきを内に隠した知的な構成、様式上の多彩な試み、均整のとれた文体など、巧緻で繊細な作風は当代に比類がなく、いわゆる新技巧派の代表作家と目された。近代的な短編様式を完成すると同時に、実生活の告白をこばみ、虚構を本質としたその文学観は、当時私小説への方向をいそぎつつあった自然主義リアリズムへの批判として、新しい文学伝統の端緒を開く歴史的意義をになったのである。

芥川文学の後期は固有の文学観＝芸術至上主義の懐疑と動揺とともにはじまる。最初のきざしは、人間の「生」に似た花火の一瞬のきらめきを、花火の消えた闇の深さとともに描く『舞踏会』（一九二九）に見られたが、作風の転換をみずからはかる試みとして、ひとりの男性を愛した姉妹の微妙な心理のあやを追う現代小説『秋』（一九二〇）も書かれている。それはやがて、自己の体験に取材した一種の私小説、保吉ものをへて、より告白性の強い半自伝体小説『大導寺信輔の半生』（一九二四）にいたるが、そのことの背後には、転換期にさしかかった時代の動向にうながされて、現実とのいやおうない対決をせまられたという事情もある。このころから健康の衰えもめだち、身近な肉親の死を回想した『点鬼簿』（一九二七）の鬼気や、河童の国を仮構して人間社会への呪詛を語った『河童』（一九二七）の絶望などに、いっそう深刻化したニヒリズムがうかがえる。『玄鶴山房』（一九二七）はそうした晩年の人間認識をみごとに具体化した傑作である。文学観の動揺も、二七年（昭和二）の「小説の筋（プロット）」をめぐる谷崎潤一郎との論争では、志賀直哉の心境小説を小説の理想と認める立場から、虚構に基づく自己の文学方法を完全に否定するにいたっている。そして同じ年の七月二四日、「ぼんやりした不安」を理由にあげて、東京、田端の自宅で服毒自殺した。

その死を決意した心情を通して、過去を痛切に回想した自伝『或阿呆の一生』（一九二七）をはじめ、キリストに擬して、芸術と日常に裂かれた自画像を描いた『西方の人』（一九二七）、狂気の心象をつづった『歯車』（一九二七）などが遺稿として残されていた。これらの遺稿は痛切な自己告白であるにもかかわらず、竜之介固有の方法とスタイルを崩していない。自己の文学方法の敗北を自覚しながら、それをついに越え得なかったところにも悲劇の原因があったのである。

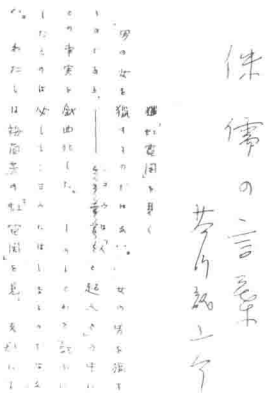
芥川竜之介は白樺派の諸作家とともに大正期の市民文学を代表し、その生涯は死をもふくめて、





芥川竜之介

1.肖像(1924)　2.新婚当時，文夫人と　3.処女創作集『羅生門』初版本表紙。みずから装丁をしたもの　4.大学時代(1916)。右から久米正雄，松岡譲，芥川，成瀬正一　5.得意とした自筆のカッパ図(「水虎晩帰之図」)　6.新潟から子どもたちへ送った葉書　7.『侏儒の言葉』原稿の冒頭部分　8.庭で，子どもたちと。改造社の文学全集宣伝のために撮った映画の一コマである



市民文学理念の成熟と動揺と崩壊を象徴した。彼の死が時代の危機と不安を告げる指標として、とくに若い知識階級に深刻な反響を呼んだゆえんである。小説のほか『蜘蛛の糸』(一九一八)など童話の作もあり、また『侏儒の言葉』(一九二七)などのアフォリズム、評論に見るべきものも多い。童話集に『三つの宝』(一九二〇)、随筆評論集に『点心』(一九二三)・『文芸的な、余りに文芸的な』(一九二七)などがある。

〔羅生門〕短編小説。一九一五年(大正四)九月『帝国文学』に発表。一七年阿蘭陀書房刊の『羅生門』に収録。王朝末期の荒廃した都。すでに墓場と化した羅生門で、主家を追われた下人が、死体の髪の毛を抜く老婆を発見し、盗賊となる決意を固め、老婆の着皮を剝いで逃走する。緻密な構成と洗練された文体で、こうしなければ餓えて死ぬという極限の状況にあらわれる、人間にとって不可避の悪の世界を描いている。作者のニヒリズムの最初の形を示す傑作である。出典は『今昔物語』。

〔鼻〕短編小説。一九一六年(大正五)二月、第四次『新思潮』に発表。一七年阿蘭陀書房刊の『羅生門』に収録。池尾の禅智内供は人並みはずれた長鼻の持主で、そのゆえに自尊心を傷つけられ、苦心のすえ、鼻を縮めるのに成功してみても、前にもまして人々の冷笑を買うという首尾をユーモラスに追う。軽妙な筆致で、人間心理の明暗を巧みに描きわけながら、内供の偽善や虚栄を諷し、他人の不幸を喜ぶ「傍観者のエゴイズム」をあばく。出世作で、出典は『今昔物語』。

〔地獄変〕短編小説。一九一八年(大正七)七月『大阪毎日新聞』に連載。翌年新潮社刊の『傀儡師』に収録。王朝時代の絵師良秀は地獄変の屏風絵を完成するために、最愛の娘を犠牲にした。娘を焼く炎の前で、彼はむしろ威厳にみちて見えた。世俗の権力者と芸術家との抗争を通じ、悪魔に魂を売り、日常の恩愛をなげうつことをあえて辞さない芸術家を描き、自己の芸術観の一端を吐露した作品。語り手を設定した説話体の裏に作者の情熱が高揚している。出典は『古今著聞集』など。

〔玄鶴山房〕短編小説。一九二七年(昭和二)一、二月『中央公論』に発表。三〇年岩波書店刊の『大導寺信輔の半生』に収録。老いて死病の床に伏す画家堀越玄鶴は、自己の半生を回想してすべて空しかったと痛恨する。その老残の苦悩と悲惨な死が描かれ、妻、妾、娘、養子など、玄鶴をめぐるおぞましい人間関係の救いのない陰鬱な風景が、死を決意した作者の「末期の眼」によって写されている。一家庭の葛藤を描いて、人間存在の本質的な悲劇性を彷彿させ、芥川的方法の頂点を示す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com